

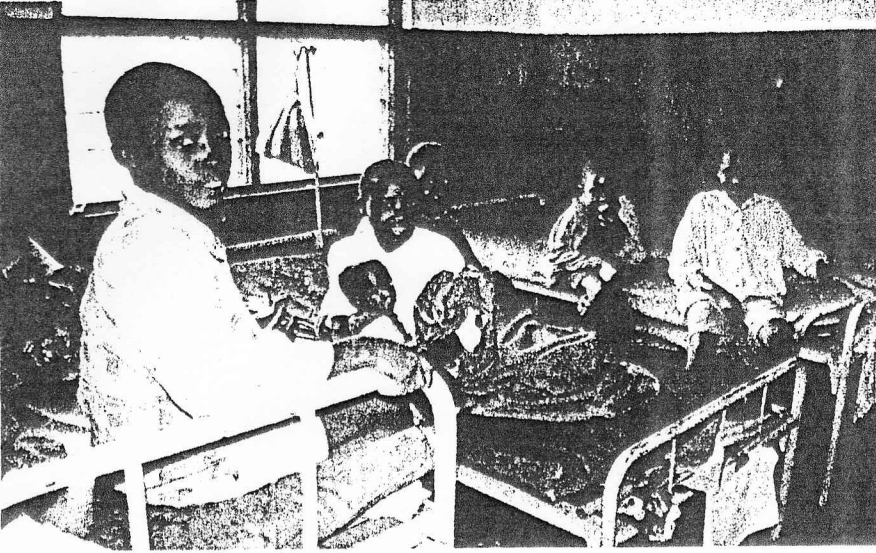
内戦のルワンダ、日本のNGO活躍

内戦のルワンダに、早くも五月中に入り、医療活動を続けていた日本の非政府組織（NGO）がある。岡山市に本部を置く「アジア医師連絡協議会」（AMDA）の、その第一陣がここへ展開した。電気や水不足に悩まされながら、日に「百人近い傷病の

治療に当たった吉田修医師（左）は、「危険？ 感じませんでしたが、事前に十分確かめました。海外の災害で、対応の遅れがとがらぬとされる日本だが、NGOは積極的な活動の羽を広げている。」

（編集委員 松本 仁二）

ゲリラ地域で医療活動



電気・水不足の中 1日約200人治療

AMDAが拠点としたのは、北部ウガンダ国境から約五十キロに入ったガラマの町。首都キガリまで約八十キロの農村地帯。AMDAは、ゲリラ組織「ルワンダ愛国戦線（RPF）」を通じてルワンダ入りした。先にルワンダで活動していたスイスのNGOが「RPFなら間違いない」と推薦したため。

五月、メンバーの三宅和久医師（右）と調整員の高橋洋子さん（左）を、奉節駐在のために現地に派遣し安全を確保。ゲリラ側と協働してガラマを拠点と決めた。実際の医療活動の第一陣として調整員の高橋洋子さんが、ガラマ病院の小児科棟、一台のベッドを二、三人で使う。奥の二人の少年は砲弾の破片を受け、骨髄炎を起していた。ルワンダ北部のガラマで、吉田修医師

AMDAが拠点としたのは五月、渡辺文彦は後方支援のためウガンダ側の国境の町カバレに残り、医薬品の輸送などに当たった。県立中央病院を退職した徳島県川町の吉田医師は六月十九日、小型トラック二台で現地に入った。ガラマは地味な山村の中心地。百五十床の病院があったが、政府側兵士の略奪で毛布や医療機器はなくなり、医師や看護婦は逃げた。心臓が心配していましたが、私は病室を確保してました」と話す吉田修医師（東京・築地の朝日新聞社）



心の石油がない。調整員の渡辺さんが、ウガンダ側から、石油を運んで回運してくることで何とか解決した。それでも、電気を使えるのは午後六時から三時間だけだった。ガラマの町でも、政府側民兵による襲撃があった。しかし、吉田医師が入ったときには診療はキガリに移っており、渡辺は片づけられていた。銃声や砲弾の破片で傷病して入院していたのは八人だった。その代わり、マリリアが流行していた。かつき込まれる患者の八割がマリリアだった。

「内戦で食料がなくなると、体力が落ちて発病しやすくなる。それに、内戦で草刈りや排水などの衛生管理ができず、蚊が大繁殖したことがあつた。」と吉田医師は、診療は週に千〜千三百人。薬は足りなくなると、困っていたところ、別の地域で活動していたフランスのNGO「国境なき薬剤師団」から、「必要なら持ち合わせて」といわれた。

「現場に行ってみなければ分からない」とあってありますよね。短かったけれども、いい体験でした」

三十万人に及ぶルワンダ難民が流出した隣国タンザニアでは、北九州市に本部を置く「アフリカ教育基金」の会が四月から援助を開始。国境のガラマ地区に二棟の病院をつくった。現地スタッフがサポートさせており、AMDAと協働して四十、五十人から高い信頼を得ている。

救援物資の投下を開始

「三マ（マール）24日」AAP時局「サイール」吉田医師は十四日、病院を第一陣のルワンダ人医師に引き継ぎ、ひとまず帰国した。AMDAとしては、状況がよくなるまで医師を交代しながら活動を続ける。同時に、「ルワンダ」の派遣も検討されている。

「難民として扱われてきた料、医薬品、飲料水で、欧州の米軍基地からウガンダの子族もつづきつつあります。すばらしい人々です」と吉田医師は、ルワンダ内戦が部族紛争のように報道されることに疑問を感じ、独裁政権と反政府ゲリラの闘いが、部族対立にすりかえられた可能性はある。

「現場に行ってみなければ分からない」とあってありますよね。短かったけれども、いい体験でした」

三十万人に及ぶルワンダ難民が流出した隣国タンザニアでは、北九州市に本部を置く「アフリカ教育基金」の会が四月から援助を開始。国境のガラマ地区に二棟の病院をつくった。現地スタッフがサポートさせており、AMDAと協働して四十、五十人から高い信頼を得ている。

「現場に行ってみなければ分からない」とあってありますよね。短かったけれども、いい体験でした」

三十万人に及ぶルワンダ難民が流出した隣国タンザニアでは、北九州市に本部を置く「アフリカ教育基金」の会が四月から援助を開始。国境のガラマ地区に二棟の病院をつくった。現地スタッフがサポートさせており、AMDAと協働して四十、五十人から高い信頼を得ている。

「現場に行ってみなければ分からない」とあってありますよね。短かったけれども、いい体験でした」

三十万人に及ぶルワンダ難民が流出した隣国タンザニアでは、北九州市に本部を置く「アフリカ教育基金」の会が四月から援助を開始。国境のガラマ地区に二棟の病院をつくった。現地スタッフがサポートさせており、AMDAと協働して四十、五十人から高い信頼を得ている。